

原 東 遺 跡

— 原東遺跡 第2次調査 —

2002

福岡市教育委員会

目 次

はじめに.....	1
1. 調査に至る経緯.....	1
2. 調査の組織.....	1
I 位置と環境.....	2
II 調査の記録.....	3
1. 遺跡の概要.....	3
2. 造構・遺物.....	5
(1) 環濠.....	5
(2) 上坑(貯蔵穴)	10
(3) ピット群・溝.....	12
(4) 蔕棺墓.....	12
まとめ.....	18

挿 図 目 次

図 1 周辺遺跡(1/25.000)	2	図10 土坑出土遺物(2/3)	11
図 2 調査範囲(1/500, 1/4.000)	3	図11 ピット群・溝(1/120)	12
図 3 造構配置(1/200)	4	図12 蔕棺墓配置(1/120)	12
図 4 環濠(1/40, 1/80).....	6	図13 蔕棺墓(1/30)	13
図 5 環濠出土遺物 I (Ⅱ層)(1/4)	8	図14 蔕棺 I (1/8)	15
図 6 環濠出土遺物 II (Ⅱ層)(1/4, 4・5のみ1/8).....	9	図15 蔕棺 II (1/8)	16
図 7 環濠出土遺物 III (Ⅲ層)(1/4)	10	図16 蔕棺 III (1/8)	17
図 8 環濠出土遺物 IV (Ⅱ・Ⅲ層)(1/3)	10	図17 蔕棺墓境内出土遺物(1/3)	18
図 9 土坑(1/60).....	11		

図 版 目 次

図版 1 調査区全景(1)(東から)	図版 3 蔕棺墓(I)(北東から)
調査区全景(2)(北から)	蓑棺墓(2)(北西から)
環濠全景(東から)	土坑 2(北から)
図版 2 環濠(1)(北から)	図版 4 出土遺物
環濠(2)(南から)	
環濠土手(東から)	

序

福岡市は古くから、大陸における様々な東アジア文化を受け入れる窓口として栄えてきました。人・物の交流は盛んで、その結果、多くの文化的遺産が培われ、今日に至っています。これらかけがえのない遺産を保護するという立場から、福岡市教育委員会では、開発に伴い失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を行ない、記録保存という形で、往時のありさまを後世に伝えています。

本書は平成12年度に行ないました、原東遺跡第 2次調査の概要について報告するものです。この調査では、弥生時代の環濠、甕棺墓等を検出するなど、多くの成果を挙げることができました。今回の調査による遺構・遺物の数々は、この地域における歴史を考える上で、重要な手がかりとなるでしょう。

この書が、市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する御理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料として御活用いただければ、幸いです。最後になりましたが、今回の調査において費用の負担をはじめとする御協力を戴きました、保坂守人氏をはじめとする関係各位に深く感謝申し上げます。

平成14年 3月29日

福岡市教育委員会

教育長 生田征生

一例 言一

- ・本書は福岡市教育委員会が2001年2月13日から2001年3月21日にかけておこなった、原東遺跡第 2次調査の報告である。調査は藏富士寛が行なった。
- ・本書で使用した遺構実測図は、担当者である藏富士の他、池田祐司、星野恵美、名取さつきが行なった。
- ・本書使用の標高は海拔高、方位は磁北である。
- ・本書の執筆・編集は藏富士が行なった。
- ・本書に関わる資料は、この後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

はじめに

1. 調査に至る経緯

平成12年11月22日、保坂守人氏より、早良区飯倉252番1における宅地造成に関して、埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受け、福岡市教育委員会埋蔵文化財課では平成12年12月19日に試掘調査を行ない、遺跡の存在を確認した。その後、両者による協議を重ね、宅地内の道路部分のみ調査を行うこととなり、2000年12月13日より、記録保存のための埋蔵文化財発掘調査を開始した。

2. 調査の組織

調査は以下に示す組織で実施した。

調査委託	保坂守人
調査主体	福岡市教育委員会
調査総括	文化財部埋蔵文化財課 課長 山崎純男
事前審査	埋蔵文化財課 事前審査係長 田中寿夫
庶務担当	宮川英彦
調査担当	藏富士寛
調査作業	井上紀世子 上野道郎 鬼塚友子 倉光アヤ子 倉光京子 小柳和子 高瀬孝二郎 細川虎男 結城千賀子 和田裕見子
整理作業	柴田加津子 萩本恵子 日名子節子

遺跡調査番号	0063		遺跡略号	HAH2	
地番	早良区飯倉4丁目252番1		分布地図記号	茶山73	
開発面積	607m ²	調査対象面積	372m ²	調査面積	378m ²
調査期間	2001.2.13～2001.3.13				

I 位置と環境

早良平野は、福岡平野、糸島平野の間に位置する平野で、その東側は油山から延びる飯倉丘陵などによって福岡平野と、西側は長垂丘陵によって糸島平野とにそれぞれ区画される。平野の中央には室見川が流れ、これら大小河川の沖積作用によって、早良平野は形成された。

小河川の発達した早良平野は、様々な台地や微高地があり、その上には多くの遺跡が営まれている(図1)。室見川東岸においては、有田遺跡群、原遺跡群などがその著名な例として挙げることができよう。有田遺跡群は西を室見川、東を金屑川に挟まれた標高15m前後の台地上に営まれた遺跡であり、弥生時代前期初頭には拠点的集落が営まれ、古代には官衙とも目される建物群が検出されている。原遺跡群は有田遺跡群の東側、金屑川の東岸にあり、標高6~7mの微高地上に占地する遺跡群である。古くは縄文時代から中・近世に至るまでの遺跡が営まれていたことが明らかとなっている。

原東遺跡は原遺跡の東側に位置する遺跡で、その西側には飯倉丘陵、そして飯倉遺跡群が存在する。原東遺跡は今回が第2次調査にあたり、遺跡の具体的な内容はまだ明らかとはなっていない。



図1 周辺遺跡 (1/25,000)

II 調査の記録

1. 遺跡の概要

調査着手前、当調査区は耕作地（田）であり、重機による表土剥ぎを開始したところ、20~30cm程の耕作土直下で遺構を検出した。遺構面は、標高5.2~5.6m程とほぼ平坦で、その大半は暗灰黄褐色（Hue2.5Y 4 / 2）を呈する、やや砂質の2次堆積土であるが、調査区南端部では砂礫に変わる。遺構は暗灰黄褐色土上で検出され、砂礫上では認められなかった。この砂礫上では20~30cm程の遺物包含層があり、弥生時代中期後半を中心とする遺物が含まれている。

遺構は弥生時代のものに限られるようで、その内容としては、(1)環濠、(2)土坑、(3)ピット群・溝、(4)壺棺墓等という多彩なものであったが（図3）、先にも述べたように、幅5m程の道路部分の調査という極めて限られたものであり、環濠は部分的に検出したのみで、壺棺墓は調査区外へと更に広がりを見せるものと考えられる。今次調査の成果は、各遺構の全容把握には程遠いものではあるが、しかし、関係各位の御好意により、一部調査対象範囲外に続く遺構の発掘、もしくは確認を行なうことができた。

当調査は、2001年2月13日に着手し、3月21日に調査を終了した。調査面積は377.5m²である（図2）。以下では、今次調査における遺構や遺物、その内容について述べる。



図2 調査範囲 (1/500, 1/4,000)

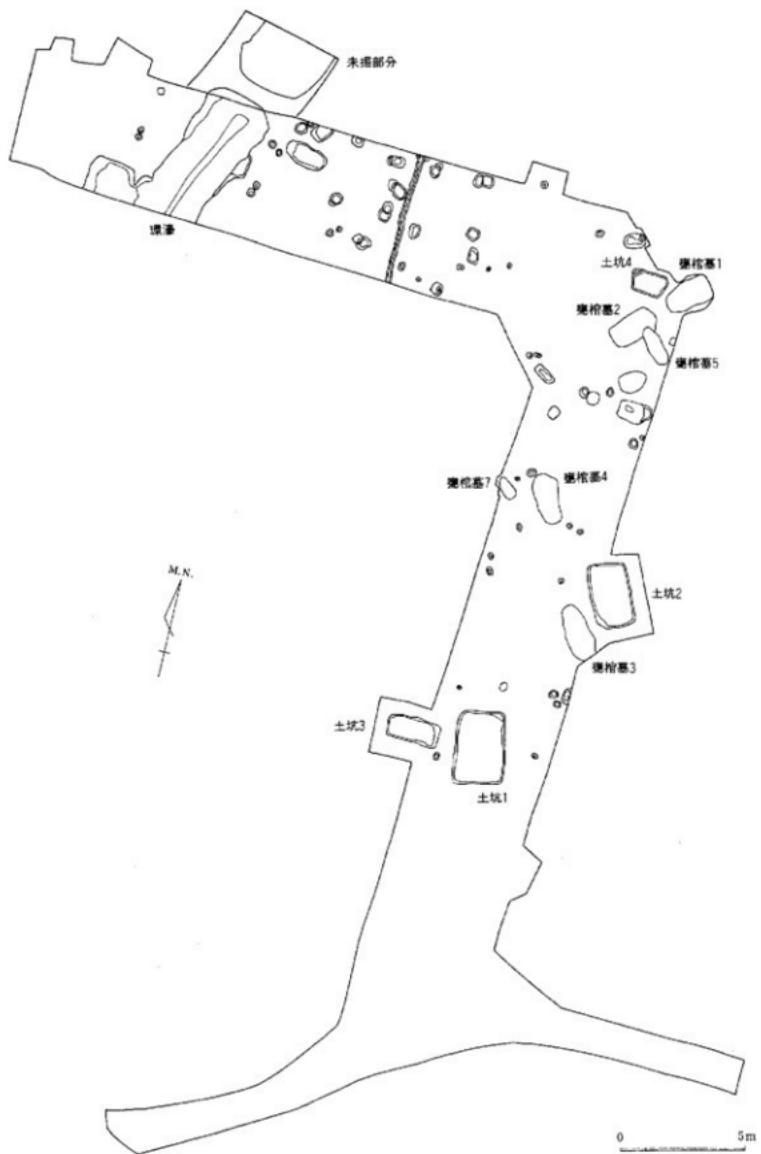


图3 遗构配置 (1/200)

2. 遺構・遺物

(1) 環濠

環濠は調査区の北西隅で検出した（図3・4）。環濠の幅は2.2～2.8m、深さは1.2mを測る。今回検出した環濠はその北端において急激に幅を減じており、さらに北側における環濠の状況を調べるために、調査対象範囲外では、表上を一部除去し、遺構平面プランの検出を行なった。その結果、土手の存在を確認することができた。環濠は断面逆三角形を呈し、底面近くで傾斜が急となるという形態をとっているが（B-B'、D-D'断面）、土手近くでは断面台形を呈するようになる。それは、底面の幅が20cmにも満たないものが（D-D'断面）、土手に近づくにつれて幅広となり、40cm近い幅を有するようになる（A-A'断面）ためで、斜面部分の傾斜自体に大きな変化は無い。ただ、土手へと至る斜面部分は傾斜が急で103°と垂直に近い立ちあがりをみせる（C-C'断面）。環濠底面のレベルは標高3.9m程度で、調査区内ではほぼ平坦である。

先にも述べたように、土手は全体の調査を行なったわけではなく、詳細は不明である。だが、遺構検出時の所見では、土手は両端が内側に向けて弧を描き、中央部が最も幅狭となる形態をとり、その幅はわずか62cmに過ぎない。当調査区は後世の削平をかなり受けしており、当然本来の環濠は更に深いものであったことは確実で、この土手はより狭いものであったことは、容易に想像できる。以上から、この土手は人の通行を目的とした「渡」土手であったとはやや考えにくく、他の用途または要因も考えるべきであろう。

環濠内における埋土の堆積はA-A'、D-D'断面に示す通りである。この中でも、a層：遺物や炭化物を多く含み、主として黒褐色を呈する土層 b層：明赤褐色土ブロックを多く含む土層 を特徴的な層として挙げることができる。b層は土塁等の構築土が、集落の廃絶後環濠内に流れ込んだものである可能性がある。環濠内の遺物は、あまり遺物を含まないb層を間層とし、a層出土の遺物を中心としていくつかの層に大別可能である。今次調査では、I層（A-A'断面：1層、D-D'断面：1層）、II層（A-A'断面：4・6・10・12層、D-D'断面：3・4・6層）と層を大別し、II層下の環濠底部に堆積した各層は、III層として一括した。またII層はb層の状況から、上層（A-A'断面：4・6層、D-D'断面：3・4層）、下層（A-A'断面：10・12層、D-D'断面：6層）に区分可能で、遺物は、可能な限り以上の大別に沿って取り上げに努めた。また、III層中からは10～15cm大の礫が多数出土した（A-A'断面参照）。これらの礫は、環濠内全体にわたってることことができ、底部から10～20cm程浮いた位置より出土している。

また今回検出した環濠南側では、環濠西側に接して方形の掘り込みをみるとことができる。その掘り込みは東西方向で幅0.9m、深さは30～40cm程度である。D-D'断面における土層観察の結果、環濠との切り合い関係をみるとることはできなかった。今回の調査では、10層にみると、この掘り込みは環濠と同時存在か、9層以上の堆積が行なわれる以前には存在していたものと判断した。いずれにせよ、環濠とは何らかの関連があるものと考えてよいだろう。

出土遺物（図5～8）

環濠からは土器を中心とした多くの遺物が出土した。遺物の出土はII層を中心とし、I・III層からの出土は少ない。紙幅の関係から、以下では、II・III層出土の土器・石器について述べることにする。

a) II層出土の遺物

土器（図5・6）

甕形土器（図5）

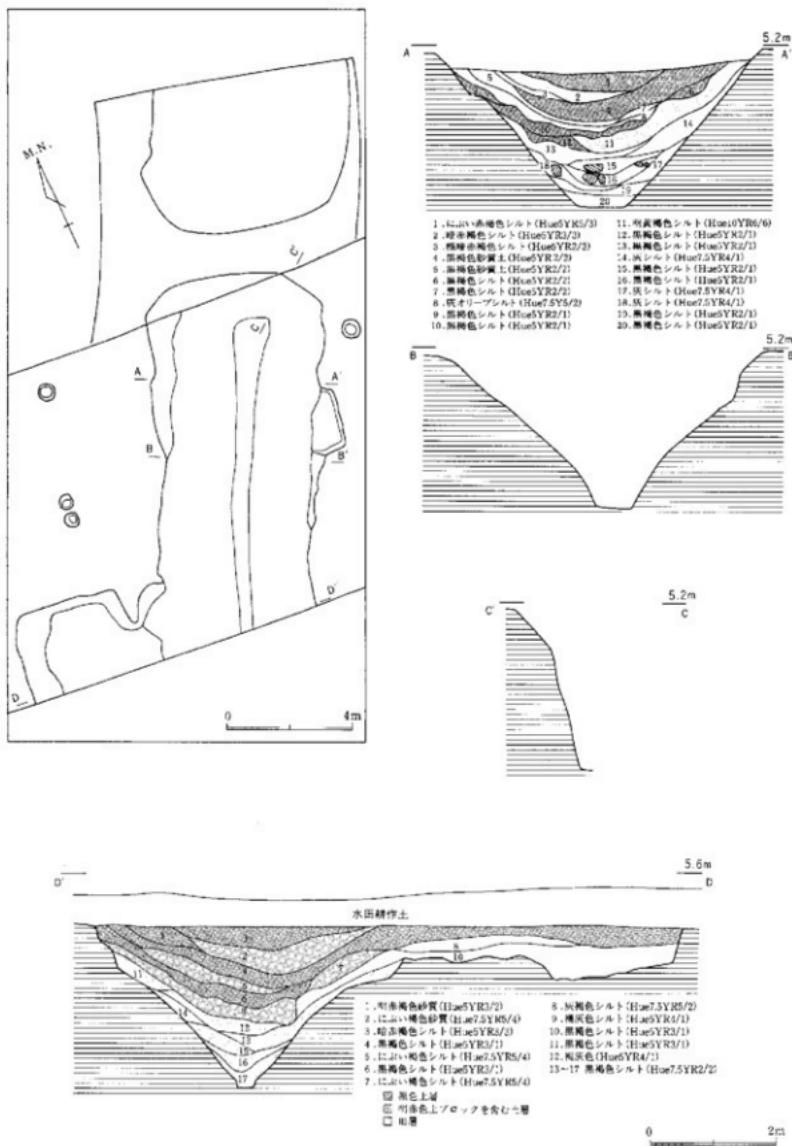


図4 環濠 (1/40,1/80)

1～7はいずれも口縁部である。1・2は口縁部に突帯を貼り付け、その上に刻目を入れる、いわゆる刻目突帯文土器である。1は口縁部がほぼ直立し、刻目を突帯半ばまで施す。2は口縁部がわずかに内傾し、突帯には浅い刻目を施す。内器面には横方向、外器面には縦方向の条痕が認められる。3は口縁部が「く」の字に折れ、端部は平らに仕上げるもので、内器面には横方向、外器面には縦方向のハケ目調整を施す。4は口縁部が断面三角形に肥厚し、その頂点に浅い刻目を施すもので、外器面には横方向の条痕を残す。口径（復元）16.8cmを測る。5は口縁部が緩やかに外反し、その端部がわずかに肥厚するもので、口縁端面には浅い刻目を施す。6はいわゆる如意形口縁を持つもので、口縁端面の下端に浅い刻目を施す。II下層から出土。7はわずかに内傾気味に立ちあがった胴部が口縁部で大きく外反するもので、口縁端面には浅い刻目を施す。外器面はハケ目調整。

8～14はある程度全形を窺うことのできる資料である。いずれも口縁部端面に刻目を有する。8～10は口縁部が緩やかに外反する如意形口縁を持つもので、11～14は前者に比して、口縁部が強く外反するものである。8は口径25.2cm、器高29.9cm、底径8.5cmを測り、口縁部端面には浅い刻目を有するもので、底部は平底。II下層から出土。9は口径24.0cm、器高25.8cm、底径9.3cmを測る。口縁部端面下端に浅い刻目を有する。底部は平底で、側面はわずかにくびれを有する。II下層から出土。10は口径（復元）22.4cmを測り、口縁部端面には浅い刻目を有する。II下層から出土。11は口径23.2cmを測り、口縁部が短く折れ曲がるもので、端面には浅い刻目を有する。外器面にはハケ目調整。12は口径（復元）23.7cmを測り、端面下端には浅い刻目を有する。外器面はハケ目調整。13は口径（復元）22.4cmを測り、口縁部端面には浅い刻目を有する。外器面には条痕が残る。14は口径21.6cmを測り、口縁部端面には11～13に比して深い刻目を有する。外器面にはハケ目調整。12～14はいずれもII下層より出土。

鉢形土器（図6-1・2）

1は口径17.4cm、器高11.3cm、底径6.4cmを測る。口縁部は端部で大きく外反する。底部は平底。外器面には一部、ミガキの痕跡が残る。2は口縁部が内側へ肥厚し、底部はわずかに上げ底となり円盤貼り付け状となるもので、口径25.4cm、器高16.4cm、底径8.2cmを測る。

壺形土器（図6-3～5）

3は口縁部を欠損する。底径5.6cm、胴部最大径（復元）18.0cmを測る。肩部はわずかに段をなし、底部は円盤貼り付け状となる。外器面は剥落が激しく、調整は明らかではないが、一部化粧土の下に施されたハケ目の痕跡が認められる。4・5は同一個体になると考えられる大形の壺形土器である。4は口径（復元）32.0cm、5は底径12.4cmを測る。口縁部は緩やかに大きく外反し、幅広に肥厚する。底部は平底で、円盤貼り付け状となる。

高杯形土器（図6-6）

6は基部片である。杯付根付近で段をなす。外器面には縦方向のヘラミガキを施す。基部径4.7cm、底部（図6-7～18）

7・8はおそらく壺形土器の底部であろう。7は底径10.8cmで、わずかに上げ底となる。外器面はヘラミガキを施す。II下層より出土。8は底径10.7cm。平底である。外器面にはヘラミガキを施す。

9～18は甕底部片である。9・10は側面が強くくびれ、底部が上げ底となるものである。9は底部側面が強く張り出し、台形をなすもので、底面はわずかに上げ底となる。底径7.6cmを測る。10は側面があり張り出さず、底面の上げ底が顕著なものである。底径5.8cmを測る。11・12は平底で、側面がわずかにくびれるものである。11は底径6.4cm、12は底径6.6cmを測る。13～18は側面が余りくびれを持たず、直線的なものである。14・15は平底で、それぞれ底径6.9cm、9.2cmを測る。14は

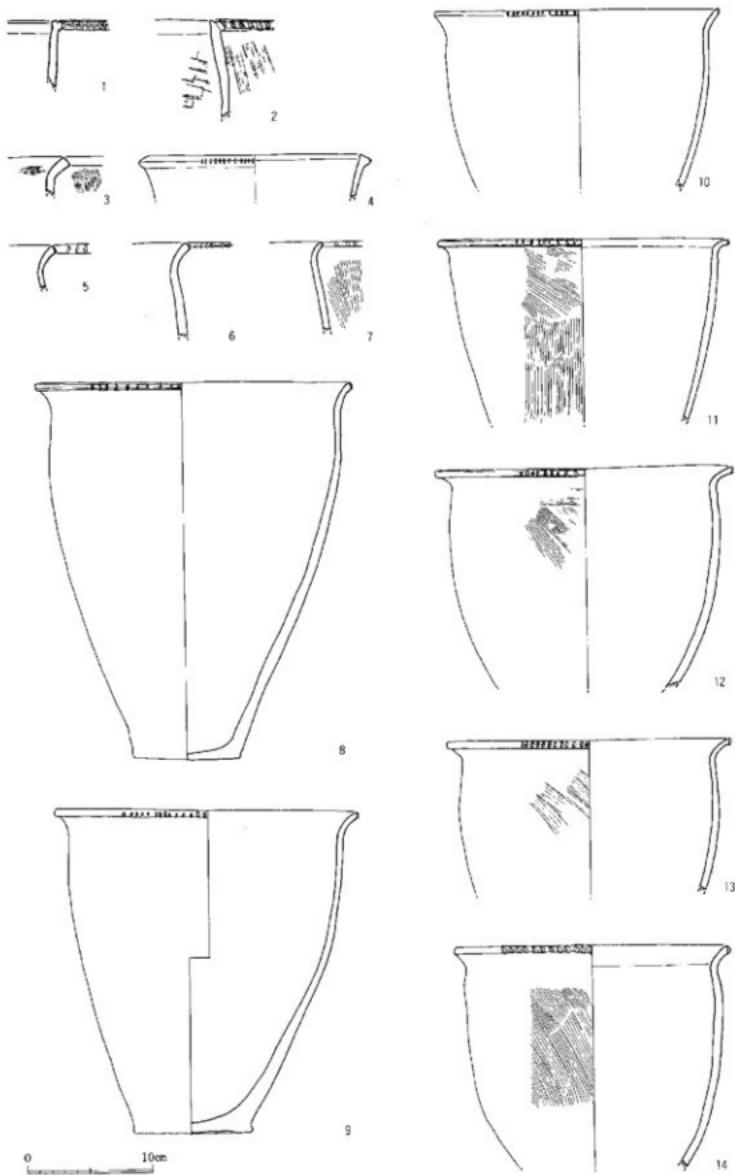


図5 環濠出土遺物I(II層)(1/4)

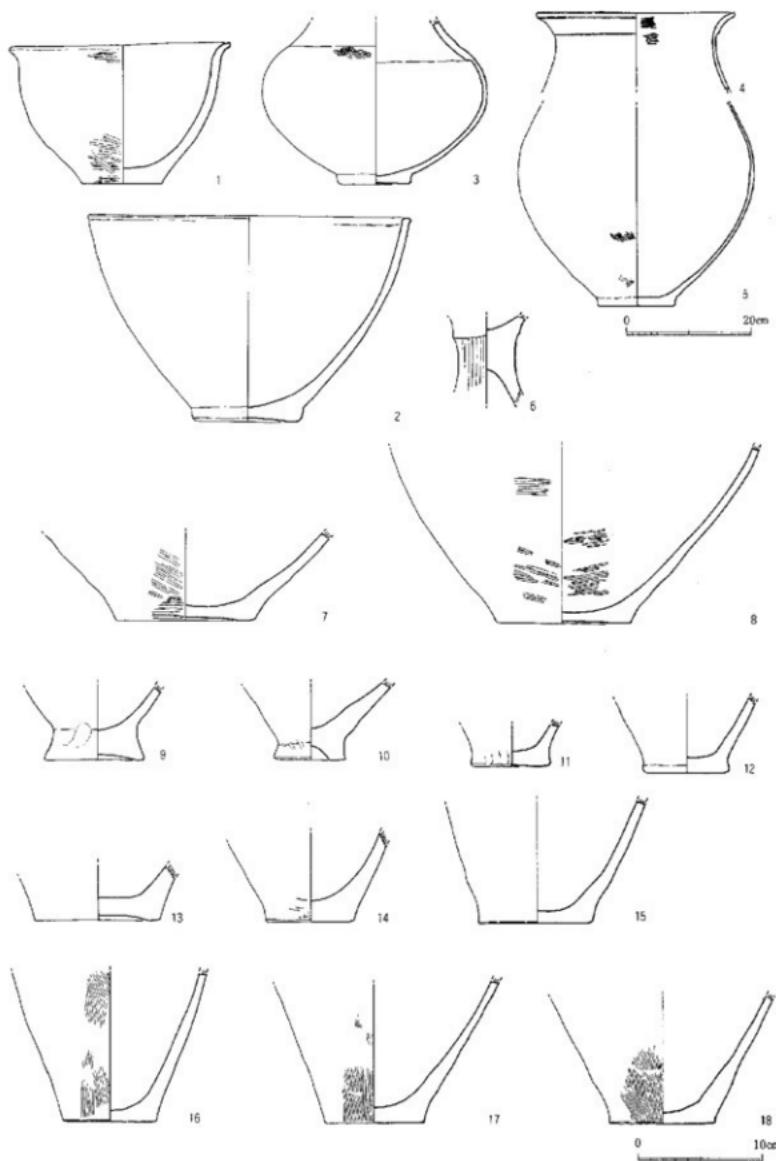


図6 環濠出土遺物II(II層)(1/4, 4・5のみ1/8)

外器面にわずかにハケ目工具痕が残る。13はわずかに上げ底状となるもので、底径(復元)10.0cm。II下層出土。15~18は平底で、外器面にはハケ目調整を施す。底径はそれぞれ7.3cm、7.8cm、8.4cmを測る。石器(図8-1)

図8-1は抉入柱状片刃石斧である。刃部を欠損する。幅2.5cm、厚さ5.4cmを測る。

b) III層出土の遺物

土器(図7)

1は壺口縁部片である。肩部で屈曲し、口縁部は軽く外反する。肩部下はケズリを施し、わずかに段をなす。肩部上はハケ目調整。口縁端面と肩部には刻目を施す。2~5は底部片である。2は底部側面が外方へ大きく張り出すもので、底面は上底をなす。底径7.0cmを測る。3・4は底部側面にわずかなくびれを有するものである。3は底径(復元)10.1cmを測る。壺の底部であろうか。4はくびれが大きく側面が外方へ張り出し気味になるもので、外器面にはハケ目調整を施す。底径(復元)8.3cmを測る。5は側面が比較的直線的なもので、外器面にはハケ目調整を施す。底径(復元)9.1cmを測る。6は蓋天井部片であろうか。全体的に薄いつくりで、天井は0.7cmと薄い。外器面にはケズリの痕跡が残る。



図7 環濠出土遺物III(III層)(1/4)

石器(図8-1)

図8-1は敲石である。一部を欠損する。上下両端に敲打の痕跡が残る。特に下側は半ばに至るまでの痕跡をみる。残存長15.7cmを測る。

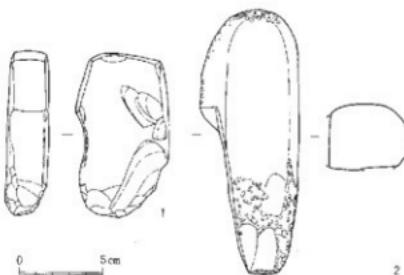


図8 環濠出土遺物IV(II-III層)(1/3)

(2) 土坑(貯藏穴)

土坑は調査区中央部に4基、検出した(図9)。いずれも長方形を呈し、大形のもの(土坑1・2)と小形のもの(土坑3・4)がある。大形のものは長軸を南北方向にとり、小形のものは東西方向にとっている。遺存状況は悪く、いずれも深さ10~20cmほどしか残っていない。その形態から、いずれも貯藏穴であろう。以下では各土坑の所見、及び出土遺物について記す。

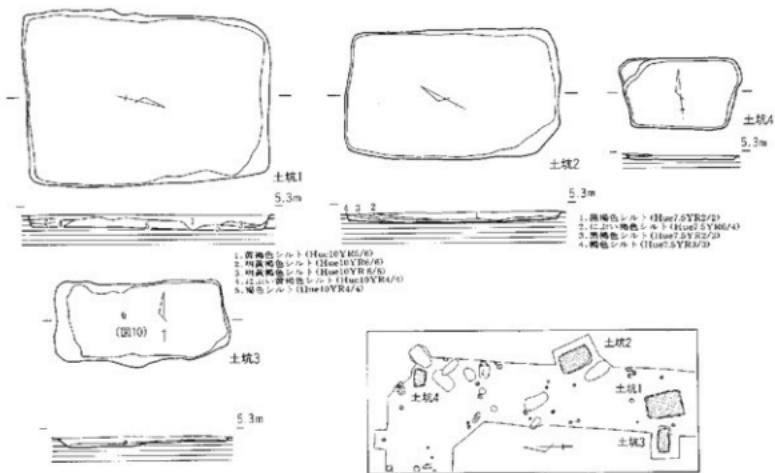


図9 土坑 (1/60)

土坑 1

長さ2.8 m、幅2 m程の土坑で、深さは20cmを測る。立ちあがりはしっかりとしており、底面は平坦である。遺物は土器の小片が出土するのみであり、図化は行なっていない。いずれも弥生時代前期に位置付けることのできるものであろう。

土坑 2

長さ2.6 m、幅1.5 mの土坑で、深さは10cm程。南側の隅部を除けば、各壁の立ちあがりはしっかりとしている。底面は平坦である。遺物は土器の小片が若干量出土するのみ。

土坑 3

土坑1の西側に位置するもので、長さ2 m、幅1 m、深さ5~13 cmを測る。西側半分が東側に比してやや深い。遺物は土器の細片の他、石器（扁平片刃石斧）が1点出土している（図10）。

出土遺物（図10）

扁平片刃石斧である。石製で長さ6.3 cm、幅2.2 cm、厚さ0.75 cmを測り、断面は長方形。刃部の研磨が進み、刃先の角度は更に大きくなっている。

土坑 4

土坑4は他の上坑より北側に離れた位置に存在する。長さ1.1~1.5 m、幅1.9 mを測り、むしろ台形に近い形態をとる。深さは5 cmと、遺存状況は極めて悪い。遺物は土器の小片がわずかに出土するのみである。

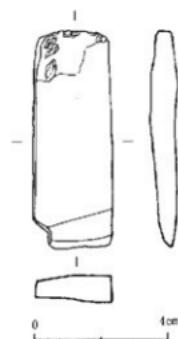


図10 土坑出土遺物 (2/3)

(3) ピット群・溝

環濠の東側10m程の範囲には、多数のピットが存在している(図11)。その中には、15~25cm程の柱痕跡が残るものも数多く存在する。出土した土器には細片が多く、時期を比定するには困難を伴うが、その埋土は環濠など、弥生時代前期の遺構にみられるものと大差はない。これらピット群を切る形で、溝が南北方向に走っている。溝は幅20cm程で、深さは5cmとごく浅い。出土遺物はなく、時期、性格共に不明である。

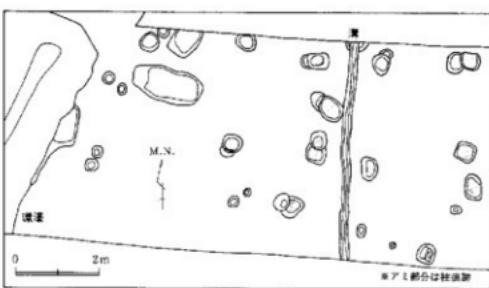


図11 ピット群・溝 (1/120)

(4) 豊棺墓

豊棺墓は、調査区の北東側に計7基検出された(図12~16)。後世の削平がかなり行なわれているようだ、墓壙内の豊棺は、ほとんどが半ば以上失われていた。豊棺墓は主軸を北東~南西方向にとるもの(豊棺墓1・2・6)、北西~南東方向にとるもの(豊棺墓3・4・5・7)の二者がある。その内、豊棺墓2と5は切り合い関係にある。調査は極めて限定的なものであったため、調査区外に他の豊棺墓が存在することは確実であろう。以下では、各豊棺墓および豊棺の所見を記す。

豊棺墓 1

調査区北東隅に存在するもので、主軸をN-49°-Eにとる。削平により豊棺の半ばが失われている。墓壙を掘削した後、下壙底部側には横壁に抉り込みを入れ、豊棺を埋置する。埋置角度は4°とほぼ水平。

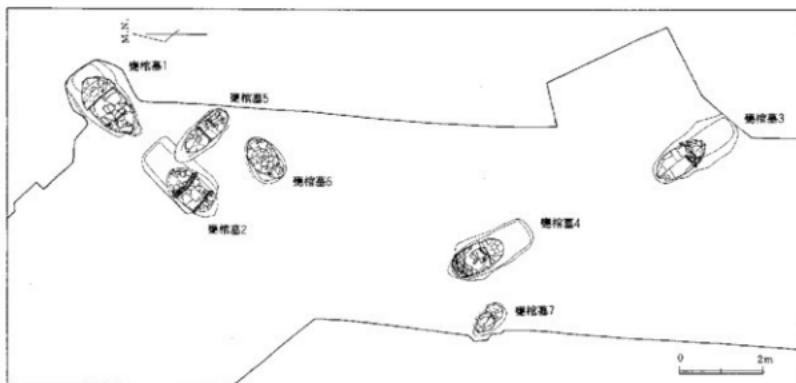


図12 豊棺墓配置 (1/120)

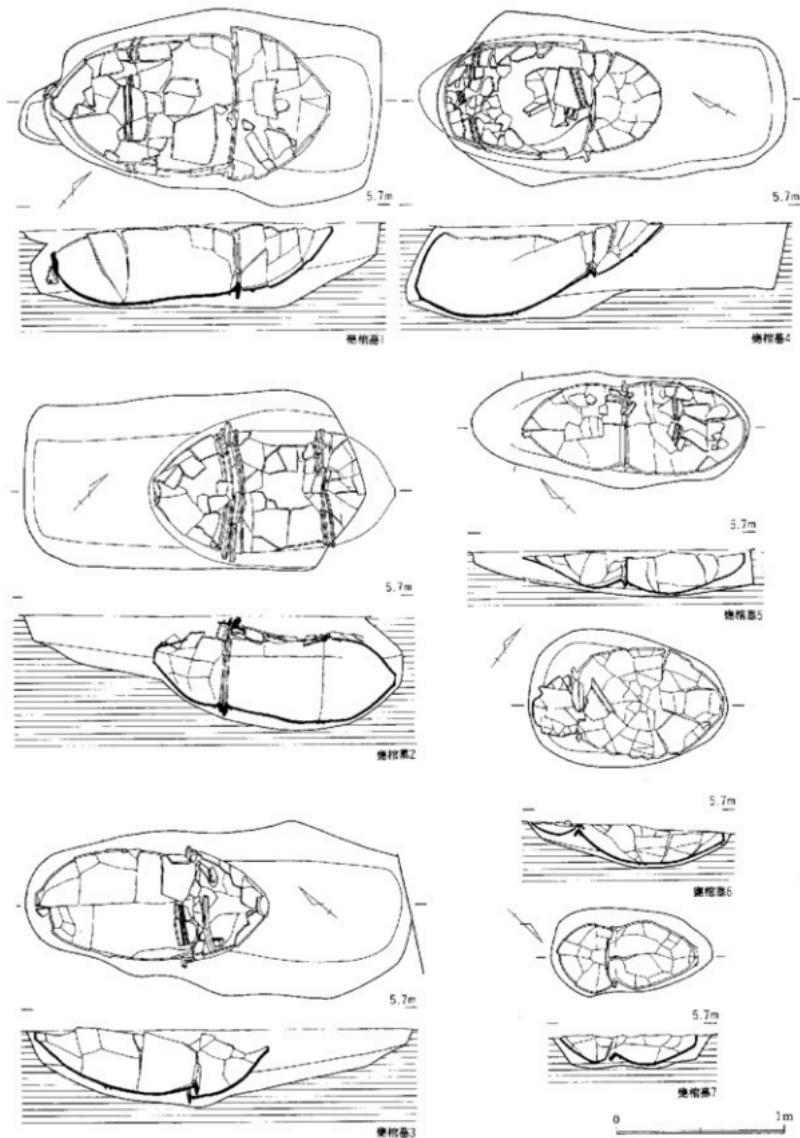


圖13 壳相面 (1/30)

壺棺（図14-壺棺1） 覆口式で、上蓋には口縁部を打ち欠いた壺、下壺としては壺を用いる。上蓋は復元口径（打欠部径）59.2cm、器高46.8cm、底部径10.8cmを測る。打ち欠き部上には、断面台形の突帯が2条巡る。器面の剥落が進み、調整は不明である。下壺は復元口径59.2cm、器高85.6cm、底部径11.2cmを測る。口縁部は内傾し、断面鋸先形を呈する。胸部上半は直ぐに立ちあがるが、口縁部近くでは内傾し、やや丸みを帯びる。口縁部下に1条、胸部に2条、断面台形の突帯を有する。外器面にはハケ目調整を施す。黒色顔料がわずかに残り、黒塗りであった可能性がある。

壺棺墓2

壺棺墓1の南西側に近接して存在するもので、主軸方向はN-49°-Eと壺棺墓1とほぼ等しい。土圧により、壺棺の一部が潰されているが、それでも比較的良く遺存していた。墓壙掘削の後、下壺側の墳底及び壁を更に掘り広げて壺棺を埋置する。埋置角度は4°。壺棺墓2は一部、壺棺墓5に切り込まれている。

壺棺（図14-壺棺2） 接口式で、上蓋には鉢、下壺としては壺を用いる。上蓋は復元口径64.8cm、器高40.1cm、底部径12.1cmを測る。口縁部は内傾し、断面鋸先形を呈する。内側への張り出しあは小さい。口縁部上には、断面台形状の突帯を1条巡らす。器面の剥落が進み、調整は不明である。下壺は復元口径65.6cm、器高100.4cm、底部径15.2cmを測る。口縁部はわずかに内傾し、断面は鋸先形を呈する。口縁部は厚く、内側への張り出しあは小さい。口縁部下に1条、胸部に2条、断面台形の突帯を有する。器面の剥落が進み、調整は不明である。

壺棺墓3

今回検出した壺棺墓の中で最も南側にあるもので、主軸をN-40°-Wにとり、壺棺墓1・2などの主軸とは直交する軸線を有する。削平により、壺棺は1/2弱しか残っていない。検出した墓壙は、長さ2.3m、幅1mの楕円形を呈し、底面はその中央が最も低い船鉢型を呈している。埋置角度は-7°で、下壺口縁部が下に向く体裁を採る。

壺棺（図15-壺棺3） 覆口式で、上蓋には鉢、下壺としては壺を用いる。上蓋は復元口径56.8cm、器高36.6cm、底部径9.2cmを測る。口縁部は内傾し、断面鋸先形を呈する。内側への張り出しあは小さい。口縁部上には、断面台形状の突帯を2条巡らす。外器面には、ハケ目調整を施す。下壺は復元口径42.8cm、器高79.8cm、底部径8.4cmを測る。口縁部は内傾し断面は鋸先形、内側への張り出しあは小さい。胸部は口縁部近くですばり、やや丸みを帯びている。口縁部下には断面三角形の突帯を1条、胸部には断面台形の突帯を2条、それぞれ有する。器面の剥落が進み、調整は不明である。

壺棺墓4

壺棺墓3の北西側に位置するもので、主軸をN-28°-Wと壺棺3と良く似た方向にとる。削平により、上壺の大半は失われているが、下壺は1/2以上が遺存していた。墓壙掘削の後、下壺側の墳底を15cmほど掘り下げ、更に下壺底部側には壁に抉り込みを入れて、壺棺を埋置する。埋置角度は22°。

壺棺（図15-壺棺4） 吞口式で、上蓋には壺、下壺には壺を用いる。上蓋は復元口径39.2cmを測る。口縁部は外反し、断面「く」の字形を呈する。頸部の上方には断面三角形の突帯を1条、胸部には断面台形の突帯を2条、それぞれ貼り付ける。器面の剥落が進み、調整は不明である。下壺は復元口径70.0cm、器高108.0cm、底部径12.0cmを測る。口縁部はわずかに内傾し、断面は鋸先形を呈する。口縁部の内側への張り出しあは小さい。口縁部下には断面三角形の突帯を1条、胸部には断面台形の突帯を2条、それぞれ貼り付ける。外器面には、ハケ目調整を施す。

壺棺墓5

壺棺墓2の東隣に位置し、その一部を切り込んでいるもので、主軸をN-45°-Wにとる。削平に

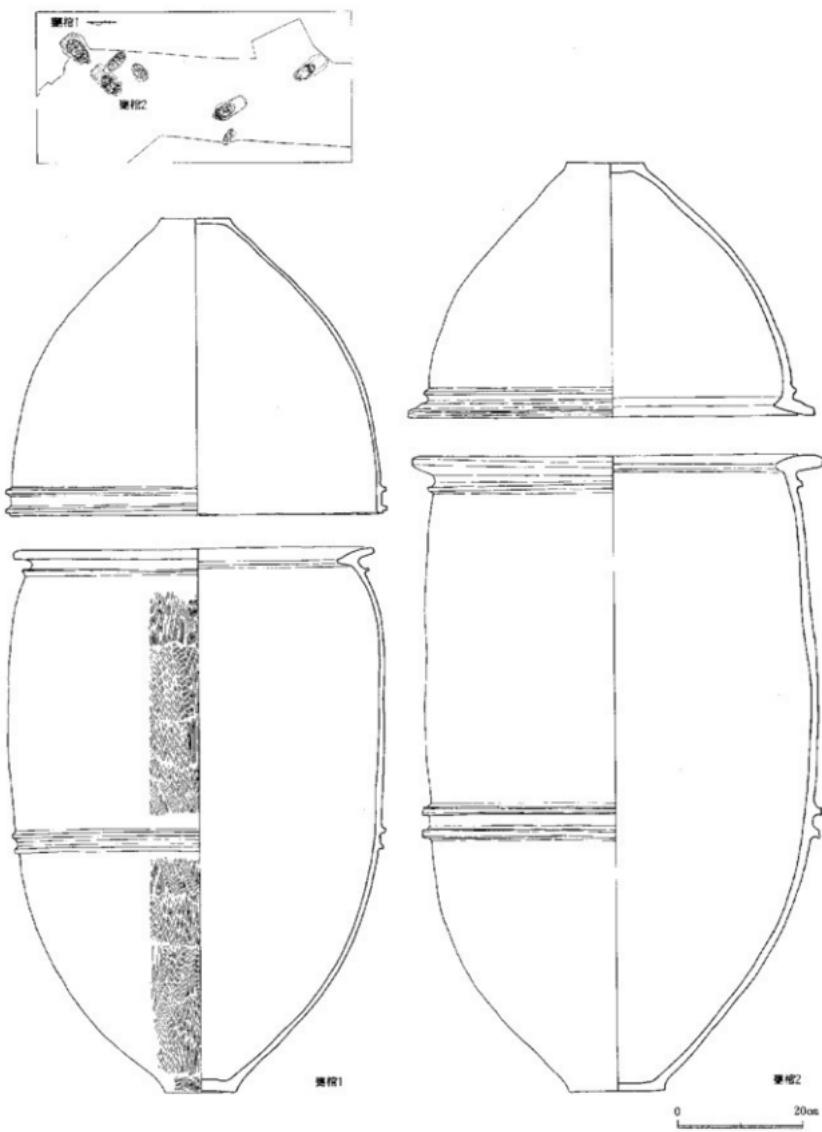


図14 墓室 I (1/8)

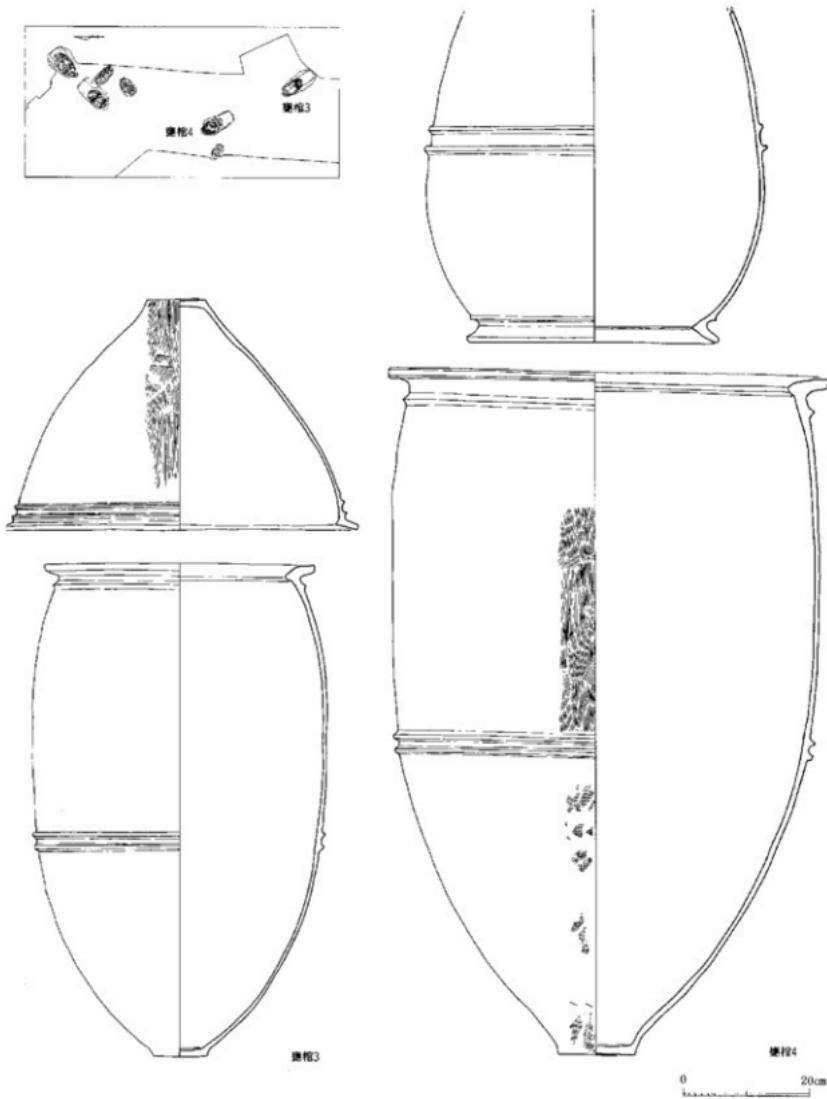


图15 墓室 II (1/8)

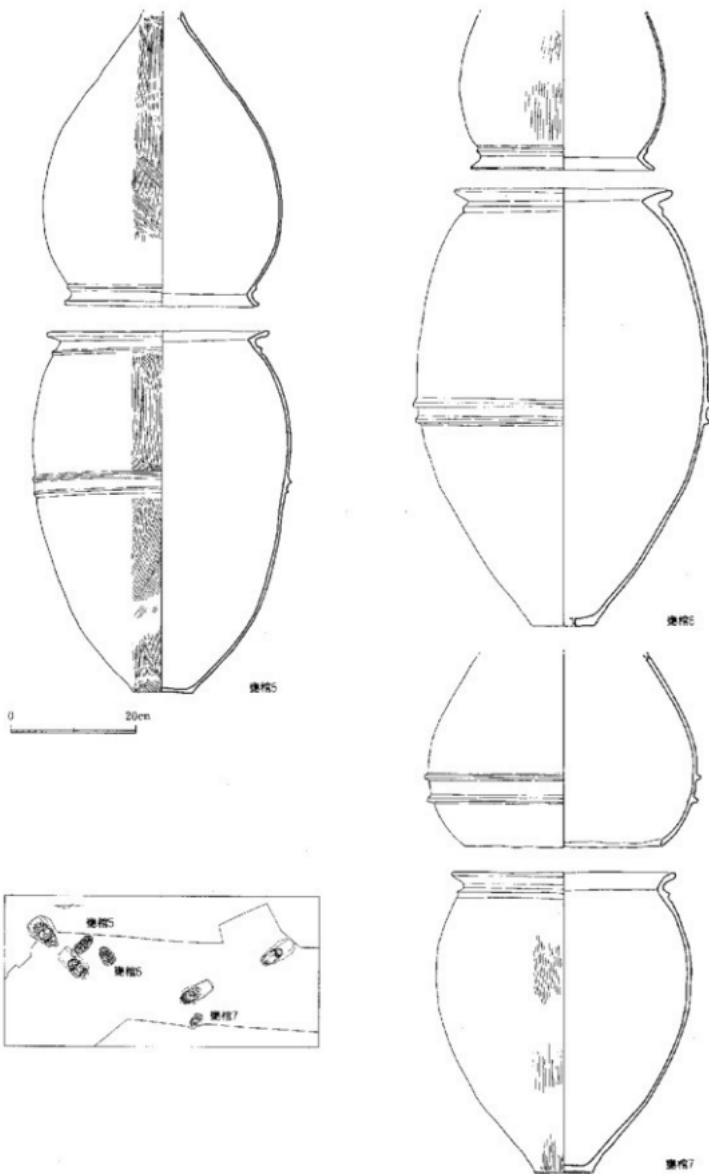


图16 墓室III (1/8)

より、蓋棺はその半ばを失っている。検出した墓壙は長さ1.7m、幅0.7mの橢円形を呈し、深さは最大で30cmを測る。埋置角度は-1°。

蓋棺（図16-蓋棺5） 接口式で、上蓋には甕、下甕としては甕を用いる。上蓋は底部を欠損しており、復元口径30.4cmを測る。口縁部は外反し、断面「く」の字形を呈する。頭部上方には断面三角形の突帯を1条有する。外器面にはハケ目調整を施す。下甕は復元口径34.8cm、器高57.2cm、底部径9.2cmを測る。口縁部は外反し、断面「く」の字形を呈する。ごくわずかではあるが、内側への張り出しが認められる。頭部下には断面三角形の突帯を1条、胴部には断面台形の突帯を2条、それぞれ貼り付ける。外器面にはハケ目調整を施す。

甕棺墓 6

甕棺墓2・5の南側に位置するもので、主軸をN-53°-Eにとる。甕棺の多くを削平によって失っている。検出した墓壙は、長さ1.2m、最大幅0.8mの卵形を呈しており、深さは最大でも20cm程である。埋置角度は9°。甕棺（図16-甕棺6） 接口式で、上蓋には甕、下甕としては甕を用いる。上蓋は底部を欠損しており、復元口径29.2cmを測る。口縁部は外反し、断面「く」の字形を呈する。頭部上方には断面三角形の突帯を1条有する。外器面にはハケ目調整を施す。下甕は復元口径34.0cm、器高69.2cm、底部径9.6cmを測る。口縁部は外反し、断面「く」の字形を呈する。頭部下には断面三角形を呈しやや幅広の突帯を1条、胴部には断面台形の突帯を2条、それぞれ貼り付ける。器面の剥落が進み、調整は不明である。

甕棺墓 7

甕棺墓4の東側に位置するもので、主軸をN-43°-Wにとる。検出した墓壙は、長さ1m、最大幅0.5mの卵形を呈しており、深さは15cm程である。埋置角度は4°。

甕棺（図16-甕棺7） 接口式で、上蓋には口縁部を打ち欠いた甕、下甕としては甕を用いる。上蓋は底部を欠損しており、復元口径（打欠部径）31.2cmを測る。胴部には、断面台形の突帯が2条巡る。器面の剥落が進み、調整は不明である。下甕は復元口径34.8cm、器高47.6cm、底部径9.2cmを測る。口縁部は外反し、断面「く」の字形を呈する。端部付近はやや肥厚する。頭部下には断面三角形の突帯を1条貼り付ける。外器面にはハケ目調整。

甕棺墓境内出土遺物（図17）

甕棺墓1の墓壙内から、石器が1点出土した（図17）。磨製石包丁である。紐穴と背部、刃部の一部が残存するのみで、全形を窺い知ることはできない。厚さは0.6cm、紐穴は外口径1.26cm、内口径0.5cmを測る。石包丁の中でも大形の部類に属するものである。

まとめ

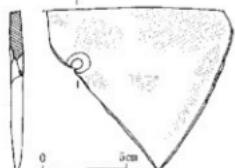
図17 甕棺墓境内出土置物（1/3）

原東遺跡第2次調査において検出した遺構は、時期ごとに以下のように整理することができる。

弥生時代前期：環濠 貯蔵穴 ピット群

弥生時代中期：甕棺

環濠から出土した土器は、やや古手のものも存在するが、II・III層出土土器のいずれもおむね板付II a式に位置付けることが可能であろう。環濠は東側に向かってわずかに弧を描いており、貯蔵穴やピット群の位置からも、ここでは、集落の中心は環濠東側にあるものと考えておきたい。甕棺は橋口達也氏の甕棺編年K III b～c式のもので、弥生時代中期後半に位置付けることができよう。





調査区全景(1) (東から)



調査区全景(2) (北から)



環濠全景 (東から)

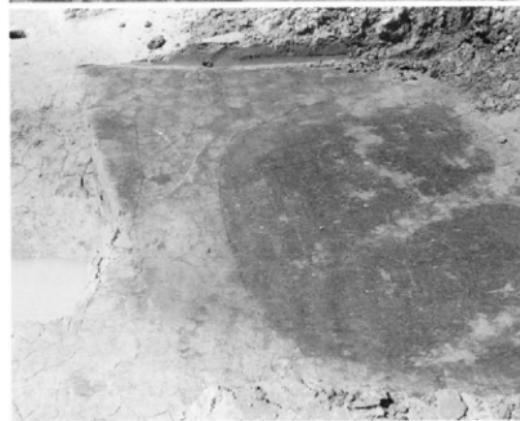
図版 2



環濠(1) (北から)



環濠(2) (南から)



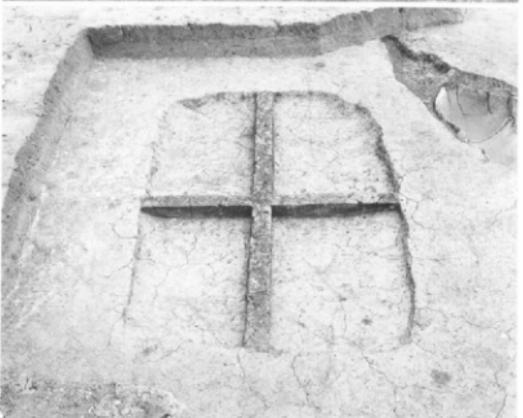
環濠土手 (東から)



覆棺墓(1)（北東から）

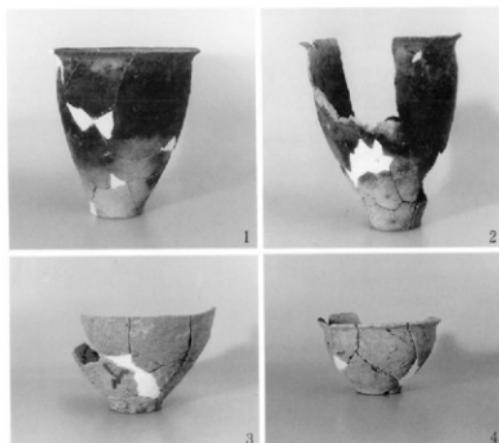


覆棺墓(2)（北西から）



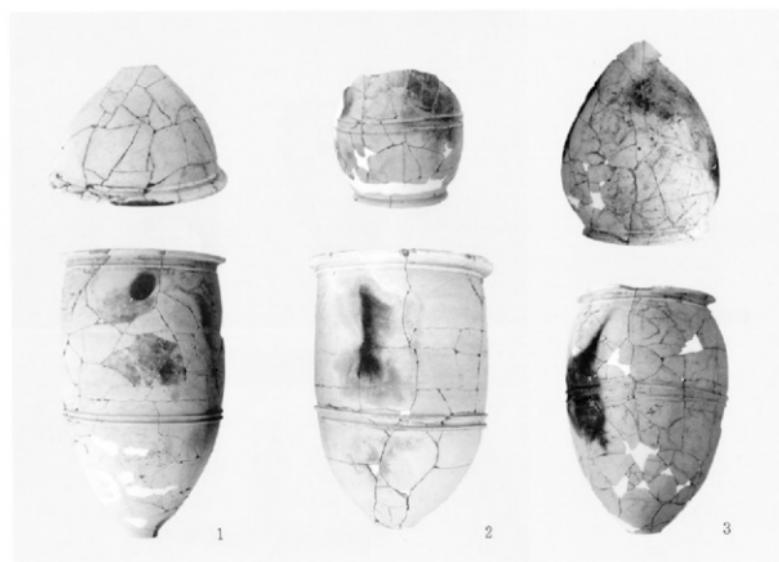
土坑 2（北から）

図版 4



環濠出土遺物

1 図5-8 2 図5-9
3 図6-1 4 図6-2



甕棺 1 甕棺2
2 甕棺4
3 甕棺5

出 土 遺 物

福岡市
原東遺跡調査報告書

— 福岡市埋蔵文化財調査報告書第724集 --

2002年（平成14年）3月29日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号

印刷 (株)三協舎印刷所
福岡市東区箱崎ふ頭六丁目6-40

